

貴重書紹介

# 「南総里見八犬伝」

畑野繭子<sup>E</sup>

請求記号 092.1/11//H

書型 半紙本  
巻数冊数 9輯98巻106冊  
板式 木版  
作者 曲亭馬琴  
画工 1-4輯 柳川重信  
5-8輯 柳川重信, 溪斎英泉  
9輯上-9輯下帙中 柳川重信二世  
9輯下帙下の上 柳川重政二世, 溪斎英泉  
9輯下帙下の中 柳川重信二世, 歌川貞秀  
9輯下帙下の下 柳川重信二世, 溪斎英泉  
板元・  
刊行年 1-5輯 山崎平八(山青堂) 文化11-文政6年  
6-7輯 美濃屋甚三郎(涌泉堂) 文政10-同13年  
8-9輯 丁子屋平兵衛(文溪堂) 天保3-同13年  
袋 5輯のみ現存

## 1 はじめに

明治大学図書館では他機関から所蔵資料の貸出依頼があった場合、一定の条件の下それに応じている。その中で依頼の最も多い資料の一つに「南総里見八犬伝」(以下「八犬伝」という)がある。全部で98巻106冊もあるこの大部な書は、積めば優に1.5メートル近くにも及び、中身はと言えば頁全体にびっしりと書かれた本文と、薄墨の彩色を施した美しい挿絵が

<sup>E</sup>はたの・まゆこ / 図書館整理課

多数盛り込まれているものである。

この「八犬伝」は準貴重書として扱われていながら、館内では「初版本であるらしい」ということが言われてきただけで、その詳細についてはこれまで十分に周知されてこなかったように思う。そこで、今回は資料紹介をかねて、当館所蔵「八犬伝」の書誌的な位置づけを探ってみたい。

## 2 「八犬伝」の成立

「八犬伝」はご存知の通り、江戸時代の読本作家、滝沢馬琴が文化11年(1814)から天保13年(1842)までの28年の歳月をかけて書き上げた大長編小説である。完成に近づいた時に、75歳の馬琴は両眼を盲いてしまい、漢語にうとい嫁のお路みちが苦心惨澹して口述筆記を果たしてようやく完成にこぎつけたという逸話は有名である。

物語は、室町時代、安房の小領主となった里見義実の息女伏姫が、父の失言のため妖犬八房とともに富山の山中深く入り、八房の気を受けてはらんだ伏姫が自己の純潔の証しとして腹を割くと、仁義八行の玉が宙に飛散するという場面から始まる。やがて関八州の各地から、仁義八行の玉の一つを持ち、牡丹形のあざを身にしろした八人の犬士が次々に出現する。そして、八犬士全員が会同し、彼らに与えられた宿縁と聖戦の使命に気づいてゆくというものである。

「水滸伝」を目標にした「八犬伝」は、勸善懲悪の内容で、壮大華麗、波乱万丈をきわめ、当時はおろか明治時代にまで及ぶ大ロングセラーとなった。ただ、近代に入って、坪内逍遙が「小説神髓」で批判した後、しばらくの間この大作の真価は忘れられていた。いずれにしても日本文学史上類例のない長編伝奇小説である。

## 3 「八犬伝」の出版事情

さて、「八犬伝」は江戸時代の小説である読本のジャンルに入るものだが、当然のことながら、当時の出版方法は現在のそれとはかなり異なっており、次のような工程で作成されたようである。

まず作者が書いた原稿（稿本）を基に筆耕が清書して板下を作り、画工が絵を描く。そして、今度は完成した板下を使って彫工が板木を彫り、校合本と呼ばれる校正摺（ゲラ）を作者に戻す。当館ではこれにあたるもので昭和35年に受け入れた「馬琴朱紙八犬伝」（091.5/4//H）という八犬伝の第3輯校正摺の零葉を左頁に、校正後の刊本の該当箇所を右頁に並置した貼込帳がある。校正摺の処々に馬琴の朱筆がみられるもので、「礪川文庫」（福井藩松平家の文庫）の蔵印がある。作者から校正摺が戻ってくると、彫工は作者が指摘した訂正箇所を板木を削って入木（象嵌）をして直すのである。このような工程から初摺本には作者の意図がかなり反映していると思われる。

他に現代と異なる点は、作者に著作権が存在しなかったことである。江戸読本の場合は、買取原稿として潤筆と呼ばれる原稿料が支払われていたに過ぎない。一大ベストセラーになった「八犬伝」を書いた馬琴が、生涯に互っ



て書き続けなければ生活ができなかったのは、実はこのためである。これに対して、板元の板株（出版権）は本屋仲間を通じて他の板元から保護されており、蔵板しているものは自由に再摺りしたり、改題本に仕立て直したりすることができた。資金繰りに窮する等の何らかの事由で板株を他の板元に譲渡してしまうのも、ごく普通のことであった。現に、「八犬伝」も全巻完結までに3度板元を変えている。1輯から5輯までが山青堂、次に涌泉堂で7輯まで、最後が文溪堂8輯以下完結までとなるが、この文溪堂の折に7輯までの板木に大改変を加えた。

このことは、多くの場合作者が関与したのは初版初摺本に限られたであろうことを推測させる。つまり、出版された後は作者といえども手出しが出来ないのである。そこで、出版書肆を確定するためにも後摺本ではなく、なってしまうことの多い刊記や見返しを完備した初版本探求が必須となってくるのである。

## 4 入手経緯

ところで、この八犬伝一揃いはいつ頃どのような経緯で明大の所蔵になったのだろうか。手掛かりの一つとしては図書台帳の購入者欄と目録の基本カード(原カードと称す)に「大屋」という名前がある。また、林美一著「秘板 八犬伝」(緑園書房 1968)の<八犬伝の初摺本>の下りに『「八犬伝」の初摺本は現在明治大学図書館に納まっているものが最も完全である。本書は昭和三十二年冬に東京神田の某古書店に出たもので、(以下略)』との記述がある。

この「神田の某古書店」とは、大屋書房のことと思われる。しかし、図書台帳の受入日は昭和32年ではなく、昭和41年9月28日となっており、原カードにも「(33.6.13大屋)」の上に「41.9.8水野」という記載がある。ここにある「水野」とは元明大教授で日本近世文学専攻の水野稔先生であろう。入手年が昭和33年なのに受入日が昭和41年といういささか奇妙な感があるが、入手時には水野先生の研究室に収蔵され、その後改めて図書館で登録を付与したのではないかと推測される。

この「八犬伝」の旧蔵者については、現物に蔵書印等の手がかりもなく、入手先の大屋書房に直接問い合わせたものの、なにぶん半世紀近く昔のことなので詳細は不明とのことであった。

## 5 明大本についての書誌的考察

現在「八犬伝」の板本は、「國書総目録」、「古典籍総合目録」に載せられているだけで約40機関が所蔵しているが、全部で98巻106冊という龐大な書であるので、載っている所蔵機関総てが全巻揃いで、初摺本に近い

という訳でもない。なぜベストセラーである「八犬伝」の板本がせいぜい170年ほどでこれほど少なくなってしまったのだろう。それは、あまりにポピュラーすぎて珍しくなかったこと、たかが小説ということで打ち捨てられ保存する人もなかったこと、江戸後期の文学を書誌的に研究対象とすることがごく近年までなかったこと、そして最大の原因は読本そのものに価値を認めることが遅かったということであろう。

それでは、残存している板本のうち、明大本はどのような位置にあるのだろうか。「八犬伝」に関する文献を集めているうちに明大本について記述されているものを幾つか見つけることができた。そこで、これらの文献を時代順に並べて「八犬伝」板本研究の流れを追っていく。

㊦ 「秘板 八犬伝」(林美一著 緑園書房 1968) 『初摺本は現在明治大学附属図書館に納まっているものが最も完全である。全輯にわたり見返しも奥付も原型を完備した美本である。(中略) ついで国会図書館にある馬琴の手拓本がよい。ただし、これは第二輯だけがよくない。見返しも奥付も初摺どおりのものがついているのだが、挿絵の薄墨板が改板後のものである。曲亭文庫の蔵印があり、馬琴の朱書もところどころ加えられているので、馬琴自身の蔵本だったには違いないのだが、何かの理由で欠けていた二輯だけを後年、補ったものではなかろうか』

㊦ 「絵本と浮世絵」(鈴木重三著 美術出版社 1979) 『(林美一)氏は第二輯の初摺りの形態について、明治大学図書館蔵本を標準品に挙げ、国立国会図書館所蔵の馬琴旧蔵本を、「挿絵の薄墨板が改板後のもの」との理由のもとに「何かの理由で欠けていた二輯だけを後年補ったものではなかろうか」と推測された。しかし、両書を瞥見した私見ではやはり馬琴旧蔵本の方が原初の体裁のように思う。明大本が白茶無地表紙であるのに対し、国会図書館蔵本は樺色がかった地紙に、古風な犬箱式の犬張子二個と雪の模様をあしらひ、やや手のこんだ感がある。』

㊦ 「『南総里見八犬伝』の初板本」(板坂則子著 『近世文芸』29・31号 1978-1979) 『文溪堂板の美しい後刷板以前に出された諸板で、伝来

のしっかりしている書、もしくは初刷、並びに変化の特徴の出ている書と考えられるものとして、次の八本を挙げる。(中略) 明治大学附属図書館所蔵本…見返し・奥附も総て備わった美本である。又、輯によっては袋迄残っている。』

まとめにおいて、国立国会図書館所蔵馬琴手拓本、学習院大学国文学研究室蔵本、東京大学総合図書館蔵本が板元で初板刊行時に作られた初摺グループとし、京都大学図書館所蔵本、明治大学図書館蔵本、早稲田大学特別室蔵本が山青堂、涌泉堂が、文政5年から追々売り出していた後摺本グループとしている。

☞ 『『南総里見八犬伝』諸本考』(朝倉留美子著 『讀本研究』第6輯下套・第8輯下套 1992-1993) 国立国会図書館所蔵の馬琴手拓本を初版本としている。1-5輯の最初の板元である山青堂版の初版系後摺本には、(A) 初版本と同一板木を用いて刷られた表紙をもつものと(B) 初版本の5輯迄の地色が、または絵柄の彩色のうち一色を選んで地色に用いた無地表紙をもつものの2種類がある。明大本は1輯が灰色無地、2輯が煉瓦色無地の表紙でB系にあたるが、1輯は地色である薄茶色ではなく灰色を用いているのが珍しい。

馬琴手拓本以外のものは、諸本すべてが様々な種類の取り合わせ本であり、明大本も同様である。これは、何次にもわたる後印印行の結果であろうか、と推測している。

## おわりに

以上のように文献を見ていくと、「八犬伝」の純粋な初版本は国立国会図書館所蔵の馬琴手拓本のみのものである。明大本はこの馬琴手拓本に近いクラスの板本であり、旧蔵者は不明だが、見返し・奥附も総て備わった美本である。また、残存している板本の中でも全巻揃いの保存状態が良いものでもある。読本研究は近世文学の中では比較的歴史が浅いジャンルである。「八犬伝」版本の研究も、今後ますます盛んになっていくだろう。明大本は諸本の中でも、書誌的に特徴のある板本の一つであり、今後の「八

犬伝」研究にも欠かせない資料であろう。

今回、「八犬伝」を調査していく過程で最も印象に残ったことは、馬琴が八犬伝にかけたエネルギーのようなものだった。この原稿のテーマを「八犬伝」に決めた後で、たまたま馬琴の日記を東京大学総合図書館の貴重書庫で見る機会に恵まれた。馬琴が既に左目を失明し、全盲になりつつある天保5年のものであったが、視力の衰えを感じさせない勢いのある文字であった。また、「八犬伝」の原稿には文章の他に、挿絵の下書きまで自ら描き、校正摺にはさらに細かな朱筆を加えて指示を出している跡が残っており、馬琴の几帳面な気質がうかがえる。なお、馬琴が没したのは「八犬伝」完成の翌年の天保14年、享年82歳であった。

## 参考文献

- è 「國書総目録」第6巻,岩波書店,1969.
- è 「日本古典文学大辞典」第4巻,岩波書店,1984.
- è 「平凡社大百科事典」第11巻,平凡社,1985.
- è 「古典籍総合目録」第2巻,岩波書店,1990.
- è 青木稔弥[ほか]編「読本研究文献目録」,溪水社,1993.
- è 林美一著「秘板 八犬伝」,緑園書房,1965.
- è 板坂則子著「『南総里見八犬伝』の諸板本」上『近世文芸』29号, p50-66,1978.
- è 板坂則子著「『南総里見八犬伝』の諸板本」下『近世文芸』31号, p53-70,1979.
- è 鈴木重三著「絵本と浮世絵:江戸出版文化の考察」,美術出版社,1979.
- è 横山邦治編「読本の世界:江戸と上方」(Sekaishiso seminar),世界思想社,1985.
- è 日本近世文学会編「明治大学図書館所蔵近世文学資料展示目録」,日本近世文学会,1987.
- è 水野稔[ほか]著「曲亭馬琴」(図説日本の古典19)新装版,集英社,1989.
- è 高木元著「読本の書誌をめぐって」『読本研究』第4輯上套, p142-156,1990.
- è 徳田武編「滝沢馬琴」(新潮古典文学アルバム23),新潮社,1991
- è 朝倉留美子著「『南総里見八犬伝』諸本考」前編『読本研究』第6輯下套, p18-108,1992.

è 朝倉留美子著「『南総里見八犬伝』諸本考」後編『讀本研究』第7輯下套,  
p3-87,1993.

è 高木元著「江戸讀本の研究」,ペリかん社,1995.